

碩士學位論文

三浦綾子の『氷点』考察
—「罪」と「死」と「愛」をめぐる—

指導教授 金 鶯 姫



ク2396

濟州大学校 教育大学院

日語教育専攻

細見典子

2000年 2月

三浦綾子の『氷点』考察

—「罪」と「死」と「愛」をめぐる—

指導教授 金 鷺 姫

이 論文을 教育学 碩士論文으로 提出함.

1999年 10月 日



济州大学校 教育大学院 日語教育専攻

提出者 細見典子

細見典子の 教育学 碩士學位論文을 認准함.

1999年 12月 日

審査委員長 _____ 印

審査委員 _____ 印

審査委員 _____ 印

目 次

国文抄録	i
I. 序論	1
II. 「氷点」における罪について	
1. 罪の概念	5
2. 人物類型別に見た罪	
1) 夏枝に見られる罪	10
2) 村井に見られる罪	15
3) 啓造に見られる罪	16
4) 陽子の罪意識と原罪	22
III. 「氷点」での死の意味	25
IV. 「氷点」から見る人生の目的と愛	32
V. 結 論	39
参考文献	40
Abstract	42
年譜	44

<国文抄録>

三浦綾子の「氷点」考察

— 「罪」と「死」と「愛」をめぐって—

細見典子

济州大学校 教育大学院 日語教育専攻

指導教授 金 鶯 姫

三浦綾子の処女作品인 「氷点」에 있어서 「罪」와 「죽음」과 「사랑」을 中心概念으로 凝縮해서 考察해보았다. 本稿는 이 作品을 家庭悲劇이라는 데에 焦点을 맞추어 考察하므로서 이러한 悲劇의 原因이 무엇인가를 追求해 왔다. 作品에 登場하는 여러 類型의 人物들은 各自의 内部에 根源의인 에고이즘을 지님으로서 葛藤關係가 深化되고 있는데 作家는 意圖의으로 이와 같은 設定을 해 놓았다고 생각한다.

본 論文 第II章에서는 登場人物별로 罪의 類型을 整理해보았는데 夏枝, 村井, 啓造의 경우에는 各自의 에고이즘에서 發生하는 偏狹, 驕慢, 自我陶醉등이 罪의 形態로 表面化되고 있는데 비해서 陽子의 경우에는 이들과는 다른 罪의 形態가 異彩를 띤다. 陽子의 경우에는 純粹無垢한 靈魂의 所有者로 設定되었는데, 그럼에도 불구하고 이러한 理想的인 人物에게까지도 罪가 있다는 것은 基督敎의 原罪觀念의 反映으로서 다른 日本作品에서는 다루지 않았던 主題라 볼 수 있다. 陽子에게도 罪가 存在한다는 것을 통해서 우리 모든 人類는 罪에서 벗어날 수 없다는 것이 成立된다. 作家는 讀者에게 「罪意識이 없는 것이야말로 最大의 罪가 아닌가」라고 反문하는데 三浦는 自己中心으로 思考하고 行動하는 人間이 서로에게 상처를 주고 마음속에서는 幸福을 바라면서도 그것을 家庭이나 社會에서 實現할 수 없는 行動不在의 人間群像들을 赤裸裸하게 形象化하고 있다. 이러한 人物들이 營爲하는 日常은 悲劇의이지 않을 수가 없다. 本稿는 登場人物들의 罪의 類型을 分析, 整理해보았으며 罪의 自覺을 통해 사랑으로 移行하는 하나의 可能性을 作家의 비전으로서 把握해 보았다. 罪意識은 必然的으로 죽음과도 연결되는데 그 相關關係는 複雜微妙하게 얽혀 있다고 말할 수 있겠다.

第III章에서는 「氷点」에서의 죽음의 意味 및 죽음의 種類를 「살」과 聯關해서 推論해 보았는데 肉体的인 「죽음」, 靈的인 「죽음」으로 大別해 보았다. 夏枝, 村井, 啓造들은 肉体는 살아 있어도 靈的인 無知狀態에 있는 살아 있는 屍体이고 그것은 精神的인 「죽음」의 狀態라 할 수 있는 現代人의 群像을 描写한 것이라고 할 수 있을 것이다. 그것에 反해서 宣敎師의 「죽음」은 다른 生命을 살리고 또

한 많은 사람들의 마음속에 永遠히 살아가는 靈의인 「삶」이라고 할 수 있겠다. 그리고 陽子의 自殺은 他人의 罪를 혼자서 모두 짊어져 가는 贖罪羊과 같은 十字架의 그리스도의 現代의再現이라고 생각된다. 作家는 이것을 聖書を 모티브로 해서 形象化했다고 생각해본다. 「氷点」에서는 여러 가지 「죽음」이 그려져 있는데 人生苦를 解決하기 위해 「죽음」을 選擇하는 것은 方法이라고 할 수 없으며 여러 迂余 曲折을 통해 罪를 인식하고, 또 罪意識을 克復하는 過程, 葛藤을 통해 삶에 이르는 行路가 眞實한 「삶」이라고 할 수 있다.

그래서 第IV章에서는 陽子가 바라던 絶對的인 「용서」야말로 하나님의 사랑이라고 할 수 있으며, 그것이 人間에게 「없어서는 안되는 것」, 永遠不變한 「참사랑」이라고 할 수 있다. 「氷点」에 있어서 이 「참사랑」이 家庭속에서 어떻게 具現되어야 하는가 라는 問題意識을 提起하면서 論하였다. 그것은 自己의 内面을 省察하면서 他人의 内面世界에도 깊은 理解와 愛情으로 參與하는 것이다. 여기서 진정한 「참사랑」이 드러나는 것이며 이를 實踐하는 것이 人生의 目的이라고 할 수 있을 것이다. 이러한 脈絡에서 「氷点」을 考察해볼 때 作家三浦의 家庭 및 社會에 처한 視點을 엿볼 수 있다.



제주대학교 중앙도서관
JEJU NATIONAL UNIVERSITY LIBRARY

* 본 논문은 2000년 2월 제주대학교 교육대학원 위원회에 제출된 교육학 석사학위 논문임.

I. 序 論

「氷点」はよく知られているように、1964年に朝日新聞が賞金一千万円の懸賞小説を募集して、入選した作品である。その作者である三浦綾子は、それ以来多くの作品を書き続けており、現代の日本を代表する女流基督教作家としての地位を築いている。また韓国においても多くの読者層を得ている。本稿では三浦綾子と彼女の作品について理解を深めるために、本論に先立って三浦綾子の研究史及び彼女の成長過程、時代背景、本稿の研究目的を簡単に整理しようと思う。

「氷点」発表当時、評論家の江藤淳氏は現代の文芸に対する挑戦だ¹⁾と述べている。こういう江藤淳氏の発言は、西田幾多郎博士の日本文学には人間の生きるべきテーマが西洋文学に比べて薄いという発言や、信仰と文学とがこれ程甚しく離れている国において、健全な文化が成長する理由がないという柳田国男氏の文明批判²⁾と通じるものがあると思われる。人間の生の根源的な問題をつくものは宗教にほかならないが、今までの日本文学では東洋思想の流れは見られても、キリスト教の信仰をはっきりと受け入れた立場で書かれた文学はほとんど見られなかった。そういう意味で三浦綾子の作品は、現代日本文学に新しい旋風を巻き起こし、今までの日本文学に多少の不満を抱いていた読者らに大いに受け入れられたのではないだろうか。

三浦綾子に関する研究書としては、久保田暁一氏の「愛と証しの文学—三浦綾子の人と作品」(1987年)、「三浦綾子の世界—その人と作品」(1996年)、佐古純一郎氏の「三浦綾子のころ」(1989年)、水谷昭夫氏の「燃える花なれど」(1986年)、「三浦綾子—愛と祈りの文芸」(1989年)などのキリスト教評論家の研究を挙げることができる。それらはキリスト教の立場から、聖書の内容と「氷点」の内容を連結しながら、信仰的な内容をよく理解して書かれたものであり、三浦の作品を高く評価しているものであると言えよう。また黒古一夫氏の「三浦綾子論—「愛」と「生きること」の意味」(1994年)は、非キリスト教の立場から理解できる内容と理解できない内容について賛否両論交じえたものと言えるだろう。しかし田川健三氏や百目鬼三郎氏らからは、「主人持ちの護教文学に過ぎない」などという、厳しい批判を受けていることも事実である。これ

1) 1965年11月26日 「朝日新聞」夕刊 文芸時評。

2) 辻橋三郎(1978)、「近代キリスト者文学論」双文社、p.260。

は三浦が『孤独のとなり』において、キリストの福音を伝えようとして書いている態度が文学的に問題視されるということはわかっているが、そういう姿勢を変えることはできないと言っているように、いたしかたないことかもしれない。本稿では聖書と信仰というものを基礎にし、考察していくが、イエスの十字架の愛を信じるだけではなく、家庭の中で愛を実践することの大切さに重点を置きながら、人間にとって「なくてはならぬもの」を作品の中から推論している点が他の論文とは異なると言えよう。

三浦の作品は、キリスト教のわくを越えて多くの読者層を持っていること、また多くの作品は韓国語にも翻訳され、愛読されていることも事実である。韓国において、三浦の作品に関する研究としては、金潤鐸氏の『三浦綾子の作品に見られる<原罪>と<ゆるし>に関する一考察』(1995年)の論文がある。これは三浦の作家論と『氷点』、『続氷点』を広く一括して考察されたもので、<ゆるし>はイエスの十字架を信じることだけによるというクリスチャンの立場から結論を下しているので、非クリスチャンにとっては多少難解な点も残しているように受けとめられた。韓国での三浦綾子に関する研究は、広い読者層に比べるとまだ初期の段階であると思われる。

「現代の奇蹟だ」³⁾と言われる三浦綾子の作品は、日本よりもかえってキリスト教の基盤がある韓国で、理解されやすいのかも知れないが、それはもしかすると三浦の出生地である北海道の気候や作品の大陸的な背景が韓国のそれと類似している点にもあるかも知れないと感じた。そこで初期作品の中にこそ作者の持つ力量が潜在していると思われたので、処女作品⁴⁾といえる『氷点』について考察し、韓国でも今後三浦作品の研究がより進行することを願う次第である。

三浦は1922年(大正11年)4月25日、北海道旭川市に、堀田鉄治、キサの第5子として生まれている。家族は祖母、両親、兄3人、姉1人、弟4人、妹1人、父の妹1人、甥1人という大家族の中で育っている。そのため人間の心情に対する洞擦力にすぐれていると思われ、これが彼女にとって小説家として多くの人物の心理描写を詳細に語るのに大きな助けとなったことは言うまでもないであろう。そしてもう一人、三浦にとって 人生の大きな転換のきっかけとなった重要な人物との出会いがある。後に恋人同志になる前川正とは幼なじみであった。その前川に導かれて三浦はクリスチャンとなるのであるが、その前に三浦にとって非常に衝撃的な事件が起こる。

3) 佐古純一郎(1989)、『三浦綾子のこころ』朝文社、p.277。

4) 三浦は1962年、『主婦の友』に「林田律子」のペンネームで、手記「太陽は再び没せず」を応募し、掲載されたが、ここでは処女作品として扱わなかった。

1939年から小学校の教員として勤務していたが、1945年の敗戦後、生徒たちに教科書に墨を塗らせる「事件」が起こる。それは三浦にとって非常な屈辱であり、自信を喪失させるものであった。そしてそれをきっかけに三浦は虚無に陥っていった。その当時の状況について三浦の作品から引用してみよう。

私は7年間、生徒に真剣に打ちこんできたはずであった。その真剣に教えてきたことが誤りだったとしたら、わたしはこの7年を無駄に過ごしてしまったのか。いや、無駄ならよい。だが誤りだとしたら、わたしは、生徒たちに、何と云って謝まるべきであろう。そう思うと、私は生徒の前に大きな顔をして、教師として立っていくことが苦痛になった。(何が正しいかもわからずに教えてきたとは……) わたしは急速に自信を失っていった。(「石ころのうた」p.293)

そして1946年3月、教師を辞めることになる。その時三浦は再び教師になるまいと固く決意した。そして自暴自棄になった三浦は何の罪悪感もなく二重婚約する。退職の3箇月後には肺結核を発病し、その上脊椎カリエスも併発する。

発病の原因は戦後の栄養不足などもあったであろうが、青春のすべてをかけて愛情と情熱を教師という仕事にかたむけたが、それが誤りであったということに良心の苛責を感じたことが三浦の体をむしばんだのであろう。信じていたものから裏切られたというその背信感、怒涛のように三浦を絶望と虚無感のどん底に引きずりこんでいく。そして虚無に陥り、自殺までも考えさせるに至った。

三浦は人間には二種類の人間がいると言っている。即ち、生きる目的がわからなければどうしても生きて行けない人間と、一切関わりなく生きて行ける人間がいて、自分はその前者だという。⁵⁾これから考察する「氷点」にもこのような人間像がうかがえる。つまり背信感から来る虚無と、人生に迷い苦悩する人間の愛憎、醜と美の錯綜するさまざまな人間達の姿である。このような三浦である故に、完全に信じられる「真理」に出合えば、人生が180度転換して、教師時代よりもっと情熱的に生きることができるのである。それがキリスト教であった訳で、三浦の情熱は基督教作家としての活躍を見れば十分に伝わってくるであろう。このように深く人間の内面を見つめる真摯な姿は、三浦の描く作品の主人公の心情世界に一貫して表われているようである。もちろんこのように深く悩み、13年もの長い闘病生活があったからこそ、「氷点」を始めとする多くの感動を与える作品を書き続けてこられたことも事実であるが、三浦の作品は、他の求道者たる作家達—

5) 「道ありき」p.25 参照。

たとえば太宰治や有島武郎など一の作品とは全く違う味を持っているように思う。それは何よりも神のくゆるしを心から信じ、感謝し、共に信仰を育てていく人生の同伴者の存在が、何よりも三浦文学の特徴ではないだろうか。

三浦は幼なじみであった前川正の熱心な勧めでキリスト教を学ぶようになった。しかし信仰を持つまでの道のりは、決して簡単なことではなかった。だが、前川の真剣で献身的な愛情によって、三浦の頑な心は次第に動かされていった。ある時、前川は三浦を救うことのできない自分を責めて、石で自分の足を打った。その姿を見て、アガペの愛で愛してくれる前川の信じるキリストをたずね求めようとした。この出来事がきっかけとなって、本格的な求道生活に入り、「罪の意識のないのが、最大の罪ではないだろうか」と気づいた三浦は、1952年、30歳の時病床で洗礼を受けた。しかし、その2年後、恋人であった前川正が、結核が悪化したため召天する。その後、熱心なクリスチャンである三浦光世と文通によって知り合い、1959年、37歳で結婚した。

このように時代的にも個人的にも試練を乗り越えて、人生における悩みと葛藤を数多く体験しながら善悪を見つめ、「自己中心」が罪ではないかと気づき、「自己中心」であるが為、家庭、国家において、幸福でありえないこと、そして幸福は遠いところにあるのではなく、最も身近なところ、即ち家庭にこそ真の幸福が始まるのだと三浦の作品は訴えていると筆者は見た。そしてそれは単に「人間愛」というヒューマニズムに終わるのではなく、神とキリストの愛に基づく永遠不変なる男女の愛、親子の愛とは何であるのか人間の心に語りかけているようだ。

そこで本稿では誰もが願うにもかかわらず、真の幸福な家庭を成し遂げることのできなかった理由を「罪」のためであるとし、それを深層的に解明するために第Ⅱ章において「罪の概念」を定義してみて、作品に出てくる人物類型別に見られる「罪」を分析する。第Ⅲ章においてはその「罪」が「死」といかなる関係があるのか作品の中から探し、第Ⅳ章においては主人公の陽子が求めた「絶対的なゆるし」を「真の愛」として見て、それこそ人間にとって最も重要であること、そして人間は家庭の中でどのように生きるべきかということを作品の中から考察する。

筆者は家庭が社会を構成する最小単位であり、その一つ一つに真の幸福が宿る時、即ち家庭に天国が到来すれば、共に傷つけ合うことのない、すばらしい社会、国家が、ひいては世界が到来すると確信する人間の一人として、宗教者であろうとなかろうと、真実の愛のあり方を「氷点」を考察しながら三浦が伝えようとした愛のメッセージを述べていこうと思う。

Ⅱ. 「氷点」における罪について

1. 罪の概念

罪について多くの人が定義してきたが、三浦はエッセー「光あるうちに」の中で罪について次のように定義している。

○ 法に触れる罪

泥棒、殺人、詐欺、傷害などから収賄、贈賄、選挙違反などさまざまある。

○ 道徳的な罪

法律には触れないが、不親切、裏切、多情、短気、意地悪など、生活の中でお互いに迷惑をかけた、かけられたりしている罪。

○ 原罪

宗教用語で、原語は「的はずれ」だと聞いている。人間はもともと、神の方を見なければいけないのに、自分ばかり見ていることが的はずれなのだ。つまり、神中心であるべきなのに、自分中心であること、これが、わたしたちの原罪なのである。（「光あるうちに」 p.38）

次に一般的な罪の概念として、宗教辞典における内容を見ると、罪という言葉は大きく区別して、法律に違反する「犯罪」、道徳的規範に反する「罪悪」、宗教的戒律に反する「罪業」の3種類の意味がある⁶⁾と書かれている。「罪業」は英語のcrimeに相当し、「罪悪」「罪業」という言葉は英語のsinに相当する。現在各国において、最も重い「罪業」はおそらく殺人であろうが、その他国家の体制上、若干の差異はある。また、動物を殺したからと言って今日死刑にまではならないが、死刑になった時代もあった⁷⁾ように、国や時代によって変わるものもあるが、一般的に本質的には時代と国家を超越して共通したものがあるのも事実であろう。

6) 종교학대사전편찬위원회(1998), 「宗教学大辞典」 한국사전연구소, p.1193.

7) 犬公方として名高い徳川五代将軍綱吉が1687年に発布した生類憐みの令をいう。

このように宗教辞典での罪の定義と三浦の罪の定義とはほとんど差異がない。前者は抽象的な概念であるが、それを小説という具体的な物語として形象化したのが「氷点」である。また「氷点」に出てくるさまざまな罪のかたちは偶然ではなく、おそらく意識的に使われていると思われる。

「氷点」において法律で裁かれる「犯罪」といえるものは、佐石土雄のルリ子殺しだけである。幼児殺害ほど凶悪で惨忍なものはないが、この人道的にも赦し難い罪を犯した犯人の佐石は留置場で自殺してしまう。殺人の背景には佐石の生い立ちや、社会的問題もあるが、人間の中にひそむ「いらいら」としたものが、大きな不幸を招いた結果だと見られよう。また、愛する妻の死という突然の出来事に弱い人間の側面を表したのもであらう。

ところがこの事件のきっかけとなった出来事が、辻口啓造の美しい妻夏枝と、映画俳優のような眼科医の村井靖夫のひとときの愛のゲームであった。この事を知った啓造が、夏枝に復讐するために犯人の娘陽子を引きとる。その後夫婦間にくりひろげられるさまざまな出来事は、三浦が言うところの道徳的な罪に該当するものである。例えば夏枝と村井の関係、夏枝や啓造が陽子に対して行なった数多くの事件などがそれである。しかし、陽子をとりまく人びとの間には何も罪の意識がなかった。これら登場人物の心理描写を通して、どのような形態の罪があり、どうしてそのような罪が生じるのか、そしてそれが原罪に起因しているということを三浦は「氷点」を通して語っていると思われる。

三浦がクリスチャンであるので、当然キリスト教の観点から罪を捉えているにはちがいないが、「罪一原罪」の問題を扱うにあたり、前に述べた「罪悪」「罪業」という言葉について、高等宗教といわれる仏教、キリスト教、ユダヤ教ではどのように捉えているか整理しながら作品を考察してみよう。

小乗仏教においては、僧の倫理を強調した律蔵(Vinaya-pikata)において、代表的である「四分律」—全ての戒律の中で最も厳格な禁戒を設定している—の第一は“淫慾法”である。この内容は性を罪悪視したものであるが、大乘仏教においては、在家者の戒律として、五戒⁸⁾を設定している。また悪とは、業(行動-Karma)の性格が自分だけの利益を追求したために、それは自身の苦しみになる。この業を悪という。(悪業、苦報、悪因、苦果)つまり自己中心から

8) 五戒とは (1) 不殺生 (2) 不偷盗 (3) 不邪淫 (4) 不亡語 (5) 不飲酒である。

招来される悪を説いている。これはいわゆる日本人がよく言うところの「罰があたった」という言葉で理解されている。このように仏教では姦淫、性について罪悪だと規定している。作品に表われる夏枝の心の動きをみてみよう。

(あの時、村井さんの情にほだされて、心がゆらいだことは悪かったとしても、それは、ルリ子の死という不当なほどの罰で罰せられたではないか) 軽い口づけをほおに受けたぐらいで、こんなつらい目にあうのは不当だと、夏枝は思っていた。(『氷点』上p.96)

この内容から見て、夏枝は罪に対する認識基準が低い人物であることがうかがえる。これは終戦後、三浦が二重婚約をしていた時、西中一郎から結納が入った日、脳貧血で倒れたことを、何もものに罰せられているように感じたことと同じような種類のものとして受けとめられると思う。なぜなら人間には生まれつき良心というものがあるため、意識的には罪を否定しても、心の奥には罪の意識があるはずだからである。人間はこのような「罪意識の無い罪人」という段階から一歩乗り越えて、成熟した姿になれる可能性をここで感じるができると思う。

次にキリスト教とユダヤ教において罪をどう見るかという、神の御旨に対する故意的な侵害と見、人間の驕慢、自己中心性、不順従に起因すると見た。⁹⁾ ユダヤ教の教典タルムードにおいて、「罪は胎児の時から人間の心に芽ばえ、人間が成長するにしたがって強くなる」「13歳の時から人間の中にある悪い衝動は、だんだん善への衝動よりも強くなる」とある。これは人間は生まれながらにして罪を持った存在であり、思春期の頃から始まる「悪い衝動」とは、性的な衝動を悪とするものと捉えてもさしつかえないと思われる。また、自己保存は全てに優るが、殺人、近親相姦、不倫な関係をするなら生命を捨てる方がましであるとしている。¹⁰⁾ これは非ユダヤ人に対して与えられた七戒¹¹⁾ にもある戒律である。また、古代ユダヤでは姦淫した者に対しては、広場に引き出し大衆の目の前で石を投げて打ち殺して風習があったことから、姦淫が最も重い罪であったことがうかがえる。なぜならそれは人間に対する罪ではなく、神に対する冒瀆であるから

9) (1993)、『브리태니커大百科事典19』 한국브리태니커회사, p.620.

10) 마이빈 토케이어(1986)、『탈무드』太宗出版社, p. 127, 134 を整理。

11) ユダヤ人には天使が与えた613もの戒律があるが、非ユダヤ人と平和な関係を維持するため、7つだけは守るようにと七戒を与えた。

だ¹²⁾と書いてある。これらを総合して考えてみれば、ユダヤ教においては姦淫が最も重い罪であることが理解できる。いわば姦淫は不義な感情を持って自己が守るべき位置を離れてしまうことである。即ちそれは無責任で自己中心な行動である。人が自己の位置を守らないというのは愛の秩序を乱す行為であり、ひいては社会の基盤を揺るがすことであるということをユダヤ教は洞察していると言える。人間は悪に陥りやすい存在であるので、宗教では人間を規制することにより悪から遠ざけようとするが、文学では規制する代わりに罪悪の中で苦痛を受ける人間像を描くことにより、真実人間はいかに生きるべきかを問いかけているといえよう。「氷点」でも啓造、夏枝、村井を中心として煩悩に苦しむ人間像が描かれている。旧約聖書においては、モーセの十戒が神と人間との契約として記されている。これにも姦淫と殺人を犯すな¹³⁾と書いてあるが、新約聖書においては、この律法をより高度な観点で捉えている。その代表的な聖句を挙げてみよう。

「姦淫するな」・・・(中略)・・・だれでも情欲をいだいて女を見る者は、心の中ですでに姦淫をしたのである。もしあなたの右の目が罪を犯させるのなら、それを抜き出して捨てなさい
・・・(中略)・・・五体の一部を失なっても、全身が地獄に落ちこまない方が、あなたにとって益である (マタイ伝 5:27~30)

人から出て来るもの、それが人をけがすのである。すなわち内部から、人の心の中から、悪い思いが出て来る。不品行、盗み、殺人、姦淫、貪慾、邪悪、欺き、好色、妬み、誹り、高慢、愚痴、これらの悪はすべて内部から出て来て、人をけがすのである。(マルコ伝7:20~23)

このように当時のユダヤパリサイ派学者一形式的には律法を徹底して厳守していた人びと一の主張よりもっと本質的な人間の内面の世界を語っている。律法を外面的には犯さなかったとしても、果たして心の中で悪い思いをしない人間がこの世のどこにいるであろうか。故にそれを知っていたイエスとバプテスマのヨハネは、彼らを指して「へびよ、まむしの子らよ」¹⁴⁾と言っている。こ

12) 前掲書「달무드」p.153.

13) 他の戒律についてはここでは言及しないので省略した。

14) 蛇の正体について統一教では以下のように言っている。黙示録12章9節に「巨大な龍、すなわち、悪魔とか、サタンとか呼ばれ、全世界を惑わす年を経たへび」とあり、しかもこの蛇は天から地に投げ落とされたと記されていることから、地に投げ落とされる前には天にいたというその古いへびは、靈的存在、

の目には見えないが、心の中に間違いなく存在している罪の思いが、キリスト教で言うところの「原罪」¹⁵⁾に起因するものであり、人間始祖アダムとイブの罪責が、親から子に、子から孫へと血統を通して綿々と全ての人間に受け継がれてきたといえよう。現代の文学の主題は姦淫を扱ったものが多いが、西洋文学において名作といわれるものは、原罪の概念が深く浸透しながらこの人間共通の罪との葛藤がはっきりとした思想を持って展開し、何らかの解決への道を示している点で読者に深い感動を与えていると言えるのではないだろうか。しかし日本の文学において「原罪」という概念は「氷点」において始めて具体的にとりあげられたといってもいいほど日本文学界にとって新鮮なことではなかっただろうか。故に三浦が「氷点」においてキリスト教でいう「原罪」に焦点を当てたことは、日本文学史上非常に劃期的な出来事だったと言えよう。それでは「罪-原罪」について、三浦は「氷点」でどのように描いているのか夏枝と啓造の心理描写から見てみよう。

夏枝は啓造を愛している。医師としても夫としても尊敬していた。何の不満もなかった。(それなのに何故村井さんと二人でいることがあんなに楽しいのかしら)夏枝にはそれがふしぎだった。今はこうして、夫が一番いいと思っていても、再び村井に会うとどうなるか、自信がなかった。制御できないのが、自分の血の中に流れているのを夏枝は感じた。(「氷点」上 P.16)

すなわち天使長ルーシエルであり、アダムとイブを誘惑した悪魔—サタン—である。

- 15) アウグスチヌスは原罪を遺伝罪と言う場合が多かったが、これは性交を原罪的なものと見る考えと一致し、カトリックの考えにも関連する。しかし個々の罪に関しては意志の作用があるということを否定できず、そこでは原罪というものが「意志の腐敗」であるという。ルターは原罪を神に対する人間の貪欲と見た。これは性交を原罪と見る考え方よりも一層強力に罪と死、罪と苦難の結合をいうこととして、創世記第3章の見解に近いといえる。(前掲書「宗教学大辞典」p.986)

統一教では人間祖先が天使と淫行を犯すことによって、すべての人間がサタンの血統より生まれるようになったとしている。その墮落の動機は、天使長ルーシエル天使界で占めていた愛の位置と同一のものを人間界においてもそのまま占めようとした過大な欲望であり、イブと不倫な関係を結んだ時、イブはルーシエルの要素を継承し、イブからアダムへ、そして全人類に墮落性本性として継承されたとする。墮落性本性は、神と同じ立場に立てない、自己の位置を離れる、主管性転倒、犯罪行為の繁殖の4つに大別される。(世界基督教統一 神霊協会(1995)、「原理講論」成和出版社、第2章墮落論参照)

スウェーデンボルグ(1688-1772)は、エデンの園にあった善悪知るの木は、文字通りに解釈するのではなく、この世的な知識と、肉体的な喜びを表したもので、このような種類の食物は、人間のより高い生にとっては、極めて害になるとしている。(헨리 리 토머스(1983)、「위대한 宗家들」종로서적, p.249)

啓造はいま、自分の心の底に暗い洞窟がぼっかりと口をあけているような恐しさを感じた。最愛であるべき妻にむかって、一体自分はなんということをしようとしているのか、この恐しい思いは、自分の心の底に口をあけたまっ暗な洞窟からわいてくるように思われた。(心の底などといって、底のあるうちはまだいいのだ。底しれないこの穴の中から、自分でも想像しなかった、もっとも恐ろしいささやきが聞こえたくるのではなからうか) (『氷点』上 P.122)

この血の中を流れる思いこそ、罪の思いが細胞のひとつひとつに、骨の髄まで巣食っているという意味ではないだろうか。また人間は二つの心を持っている矛盾した存在であることがわかる。本心と矛盾した心を邪心というならば、その邪心はいったいどこから湧いてくるのだろうか。それは誰もが持っている「底しれない穴」から湧いてくるのだと三浦は言っているが、これが原罪と通じるものであると筆者は受けとった。そこで次に登場人物から見られる罪の類型を考察することにより、本質的な罪の問題について詳しく述べてみようと思う。



2. 人物類型別に見た罪

1) 夏枝に見られる罪

人情的に見れば実際に男女関係があったわけでもなく、夏枝の持つ一種の「男の愛を独占したい気持ち」は、女であれば誰もが多少は持っているものであり、それが愛する娘の死という罰で罰せられたのは、なるほど不当だと言えるかも知れない。水谷昭夫氏は夏枝が村井に言い寄られている場面をとりあげて次のように語っている。

うっとりとなるような日常性、そのこと自体をとりあげてみれば、夏枝をとりまくすべての人びとが、あれほど苛酷な試練のなかになげこまれるほどの罪だとは見えない。むしろ人間の生命感に根ざした甘美な思い出であり、人間的あわれみの情からみれば充分同情されてしかるべきである。それがルリ子惨殺という出来事とかかわるとき、事情はまさに一変するのである。¹⁶⁾

16) 水谷昭夫(1989)、『三浦綾子一愛と祈りの文芸』主婦の友社、p.47。

もちろん夏枝と村井の行為が独身の男女の間でなされるなら、何の問題もないかもしれない。しかし夏枝は自分が啓造の妻であり、ルリ子の母親であるという事実をないがしろにしたのである。これは特に現代の文明社会を中心に蔓延している失樂園ブームや、古今東西の文学作品で扱われてきた男女問題のように、制度外の愛を求める人間社会に対する警鐘であり、性の奴隷になったような人間があまりにも多い現在の実状を描写するものではないだろうか。罪の誘惑は甘美でも、罪を犯した後にやってくるのは後悔と恐怖と虚無感であるのに、水谷氏はクリスチャンでありながら、甘美な恋愛の情があってはならない人間同志の間で起こること自体を罪だとは捉えていないようで、罪の観念を曖昧に把握しているように思える。なぜなら自分の配偶者が他の異性に恋愛の感情を持つことを容認する人間はほとんどいないからである。

では事件後の夏枝の心理描写を引用してみよう。

(あの日、村井さんが訪ねてこなければ、ルリ子は殺されなかったのに) 夏枝はあの時ルリ子を外へ出したのが自分であることを忘れてがっていた。責任を村井に転嫁したかった。村井のせいによって夏枝は、心の負担を軽くしたかった。その身勝手さに夏枝は気づかなかった・・・(中略)・・・(あの日、村井さんがあんなことをいい出したのが悪いんだわ) 夏枝は自分が村井の愛の告白を待ち受けていたことを忘れていた。都合の悪いことはみんな忘れて、すべてを村井のせいにしたかった。(『氷点』上 P.96～97)

このように自己を正当化すること自体が、罪であることには気が付いていないのである。そしてもう一つは村井に責任転嫁しようとする心、また夫があるにもかかわらず、他の男から愛を得ようとしたり誘惑すること自体が罪であることにも気付かないのである。夏枝は美しい上に物腰も柔らかく、優しい妻である。村井に魅かれる気持ちはあるが、夫を捨ててまで村井のもとに走るといっただけでもなかった。もしあの日村井が現れなくてルリ子の殺人事件がなかったとしたら、果たして夏枝のような人間は幸福な妻として、母として人生を終えるであろうか。真面目で女遊びもしない夫の対して何かつまらないような感覚を持っている夏枝が、村井でなくとも自分より美しかった陽子に嫉妬して北原までも誘惑したように、夏枝は遠からず浮気をして家庭を崩壊させるのがおちであろう。そしてもっと悲惨な人生を送るかもしれない。言いかえれば、人間は何らかの要因によって浮気や殺人を犯すが、すでに心の中にその種子となるものを持っているのが人間の姿である。ここ

で原罪という概念を持ち出すことができる。全ての人間は潜在的に罪を犯す可能性を持っている悪人だと言えるであろう。罪を犯すのは瞬間的なことである。しかし後では自分でも自分が犯したとは信じられなくて「魔が入った」と言うのである。つまり瞬間的に心のすきに悪魔が入りそれに支配されてしまった結果なのである。では「罪を憎んで人を憎まず」という言葉のように、どうすれば人間は罪を乗り越えてお互いを赦し愛し合えるのであろうか。この問題は後に追究することとする。

ところで夏枝は家族に対してはそれなりにつくす女性である。しかし心の中では自己愛が異様に強く、自分以外の人の気持ちを深く思いやることのない女性である。そして自分の美しさに溺れ、それを武器にして男の心を自分に引きつけようとする女であり、自分に関心を持てば適当に楽しんで飽きたら捨てるが、自分に魅かれない男は許せないというエゴイストである。結局表面的には全てに満たされていた夏枝は、模範的な夫との愛に何かしら心の渇きを感じていた虚無の空間を埋めるため、戀愛をゲームのように楽しんだ。その結果ルリ子を失い、家族間の愛も失った。またその虚無感を満たそうと、次から次へと戀愛を楽しもうとする夏枝の行きつく先はどこであろうか。虚無は全てのものを喪失させる、心の中の恐ろしいブラックホールのようなものであろう。これは夏枝だけではなく、物質的に満たされつつある現代人が陥りやすい破滅の道に外ならないということを、三浦は読者に警告していると思われる。これは必ずしも物質的な貧しさによって心が貧しくなるのではないということを示唆したものだとも言えよう。

また夏枝は愛に対しても、自分を愛してくれるから愛するという幼さを持っている。そしてあれほどまでに魅かれていた村井に対しても、療養所から帰って来た村井のやつれた姿を見て、軽蔑するような冷たい眼ざしを向ける夏枝の姿ほどエゴイスティックなものはないだろう。後に北原が陽子の出生の秘密を知っても陽子を愛すると言う姿を見て、夏枝が理解できないのも夏枝らしいエゴイズムを感じることができる。

（徹といい、北原といい、今の若い男性は、恋人の親が人殺しでも、大して気にもとめないものなかしら。わたしなら、どんな人が好きでも、人殺しの息子だと聞いたら、逃げださずにはいられないわ）ふしぎなことだと夏枝は思った。（「氷点」下 P.339）

このように夏枝の愛は、自分に都合のいい愛であり、夫の心情や他人の心情を考えることのない独善的なものである。自分のとる態度が、どれほど周りの人間を傷つけるものか考えもしないエ

ゴイストである。このエゴイズムは、何も事件のない平穏な時には表面に表われないが、何らかの悪い環境に置かれた場合、それは個人のみならず家庭も何もかも、全てを崩壊して飲みつくす恐ろしい武器になり得ると言えよう。やがて夏枝は陽子が殺人犯の娘であることを知り、夫と陽子への激しい憎しみのため陽子の首をしめて殺そうとした。あれほど佐石に対して憎悪感を持ってきたのにもかかわらず、今度は夏枝自身にも佐石と同じく、人を殺そうとする血が流れていることが明らかになったのである。

夏枝は自分のしたことに気づくと、恐ろしさに体がふるえてならなかった。どんなことがあっても、自分の一生に人を殺そうとすることがあろうとは、夢にも思わなかった。(『氷点』上 P.245)

佐石は悪い環境で育ち、さまざまな苦勞の末ちょっとした過失で運悪く殺人者となってしまった。ところが夏枝は上流階級で何の苦勞も無く育ち、憎悪から陽子を殺そうとしたが、運良く殺人者にはならなかっただけである。ここには三浦の社会告発意識も見られるが、心の世界ではどちらが「罪ある」人間なのだろうか。結局、佐石も夏枝も同一線上にある「罪ある」人間であるのだ。そしてこれは人間だれもが持っている可能性であり、環境によっては簡単に罪を犯し得るのである。

このように夏枝は殺人という犯罪に対しては罪意識を持つが、夫と陽子に対する復讐心と行動については何の良心の苛責もないばかりか、むしろそうするのが当然だと思っている。いくつか作品から引用してみよう。

とにかく、夏枝は啓造をうらぎりたいと思った。村井によって啓造を苦しめたかった。しかし陽子を育てさせられた口惜しさは、それで消えるとも思われなかった。だが、どうにかして啓造に復讐したかった。村井と結ばれた自分がどうなるかということは、考えなかった。(『氷点』上 P.345)

夏枝は自分のしたことに良心の苛責さえない。むしろ殺されたルリ子の復讐をしているような気にさえなってきたのである。夏枝は自分の計劃通りにならないことに、無性に腹を立てていた。(『氷点』下 P.146)

とにかく夏枝は陽子がうとましかった。それはルリ子の母として当然な感情だと、夏枝は思ってい

た。陽子を受さなければいけないという感情も、夏枝にはなかった。一つ釜の飯を食べさせ、着物を着せ、学校にやっているだけで十分だと夏枝は思っていた。(『氷点』下 p.319)

いくら陽子が殺人犯の娘だからといって、今まで育ててきたという母親の情までも捨てられるのかという疑問も湧くかもしれないが、完全に悪の方向に人間の心が傾いてしまえば、常識では考えられないような行動をとるまで人間を狂わせる悪の勢力の存在というものを感じさせるような内容であると思う。こんな夏枝であるから、陽子に「おまえは殺人犯の娘だ」と言っても何の罪悪感もないばかりか、思っていたことの十分の一も言えなかったのが口惜しいと腹を立てるのである。自分のとった行動が陽子を死に追いやる結果になるとは夢にも思わないで……そして陽子が自殺を計り、死にそうになった姿を見てもなお夏枝はこう思うのである。

(何も死ななくてもいいのに)自分への面あてのように薬を飲んだ陽子を、夏枝は心の中で責めていた。かわいそうだと思うよりも、自分の立場も考えてほしいと夏枝は思っていた。(このまま死なれたら、人はわたしを何というだろう)夏枝はそのことが気がかりだった。(『氷点』下 P.354)

このような夏枝の感情は、子供を殺された母親なら持ち得る感情かもしれないが、ここでもあくまで自分を守ろうとするエゴイスティックな内面を感じる事ができよう。ところが実は陽子が犯人の娘ではないことを知って、初めて自分のしたことの恐ろしさに気付き、心から「ゆるして」と謝まるのである。夏枝は自分に被害を与えた人間に対しては、決してゆるしたり愛したりしない。また、いわゆる「犯罪」さえ犯さなかったら悪くはないのだと自己を正当化する人間である。しかし自分自身の行動が何の罪もない人間に対してしたことだったと知った時、本心から反省して「ゆるし」を請う。その姿はイエスの罪の無い死を見て「ゆるし」を請う罪人の姿と通じるところがあるようだ。つまり夏枝はどこにでもいるごく普通の人間なのである。これから三浦は、夏枝だけが継子いじめをする特別悪い人間なのだと言いたいのではなく、人間が当然だと思っている行動や思いに「罪」が宿っているのであり、それが他人だけでなく、自分をも不幸にしているということを誤魔化さずに読者に突きつけ、そのような生き方は本来の人間のあるべき「生」ではないと訴えようとしていると筆者は見た。端的に言って夏枝の罪は、自己陶醉から来る自己中心の思いと行動であるが、それが自分のみならず他の人間までも不幸に陥らせたことだと言えよう。

2) 村井に見られる罪

もちろん村井自身も人妻を誘惑すること自体が罪であるとは夢にも思っていないのである。結婚という制度を無視しても、自分の欲望のままに生きるモラル意識のない人間として登場している。そしてルリ子の死に対しても、何の責任も感じないで、夏枝と関係を持ち続けようとするのである。村井はある意味ではデカダンス的な人間であって、制度の中での価値観を無視して自分の本能のまま行動する人間である。この村井のような生き方を見て、果たして自由だと言えるのだろうか。村井もまた夏枝と同じように、虚無感を充足させる手段として、異性に近づいている性欲の奴隷に過ぎないのである。奴隷であるから不自由な人間であるのは言うまでもない。自由と放縦をはきちがえている人間があまりにも多いということを三浦は示唆しているようだ。

またこの虚無感に陥った人間というのはやたら他人からはニヒルな魅力さえ感じられて格好よさを感じさせるのかも知れないが、辰子のような人間の内面を見る目を持つ女性からは好かれぬ人間である。村井に見られる虚無的な考え方は、夏枝のそれと同じように、多くの人間を不幸におとしめる毒薬に外ならない。これは三浦が二重婚約しても何の罪悪感も感じなかったことと同一のものがあるだろう。虚無について三浦のエッセー「光あるうちに」でこう書かれている。

この世は虚しさに満ちている。だから、この世に対して虚無を感じるのはむしろ当然である。虚しいものを虚しいと感ずることに、恐れることはない。恐るべきものは、虚しいものに喜びや生甲斐を感じて、そこに浸ることである。この頃よく、虚無と実像という言葉聞くが、虚像を実像と見、実像と錯覚することは確かに恐れねばならない。虚無とは、自己を喪失させ、亡びに導く一つの力であると言える。虚無に満ちているか、どうか気づくことは、結核や癌の早期発見以上に大切なことなのだ。(「光あるうちに」P.105)

結局村井の虚無感が、夏枝の家庭だけでなく、純心な松崎由香子の人生までもめちやくちゃにしてしまうのである。村井が結核にかかったのは、虚無感が人間の肉体までも虫食むことを意味したものだとも捉えられるし、無意識の中で罪意識を感じていたことの表象として、また天罰を受けたことの象徴的な意味としても受けとることができるように思う。

ところが危うく死ぬという経験をして村井のすきんだ心と人生観は変わらなかった。肉体は治っ

たが、心の中にある虚無は癒せなかった。生きるということに何の希望も感じられない自堕落な村井の姿ばかりが、浮き彫りにされているようであわれな感じさえる。

特にそれがうかがえるのが村井の結婚観ではないだろうか。相手の人格を尊重したものではなく、結婚の意味もわからずにケケ事のように考えている。何のビジョンも努力も希望もない村井の結婚が、幸福なはずはないであろう。こんな人間と結婚する女性も、間に生まれてくる子供達も、不幸な人生を送るであろうことは容易に考えられる。もちろん熱烈に愛し合った男女であっても、年月がたつとお互いに愛情が薄れてきて、別れなかったとしても愛情の無い生活をしている夫婦はいくらでもいるのが現実である。しかしそうだからといって、だれと結婚しても同じだと最初から抛棄したような考え方は、相手の人格や結婚の持つ神聖さや契約性をないがしろにしていると言えるのではないだろうか。この稚気極まりない未成熟な村井のようなタイプの人間が、正常な家庭生活を送れるとはほとんど感じないが、愛情のない家庭とそこで引き起こるさまざまな問題は、そのまま現代の社会問題である離婚、不倫、青少年の非行など、愛情にからんださまざまな問題につながっていくのではないだろうか。

村井がこのような虚無的な考え方をするに至った背景が具体的に作品に書かれていないのは、村井の持つ邪悪さを一層際立せるものになっている。それに反して、高木が村井のことをあれこれ心配したり考えてやることから、高木の人格に幅が感じられるのも対照的で興味深い。端的に言って村井の罪は、その時代の道德観や因習からはずれた考え方と行動で、自分だけでなく他人の人生をも滅ぼしてしまうところにあると言えよう。それは戦後の荒廃の中で人間性を喪失したことによってもたらされた虚無の形として形象化されているのである。

3) 啓造に見られる罪

では啓造の場合はどうであろうか。まず、啓造と夏枝の違い点は何かという点、啓造は「汝の敵を愛せよ」という言葉は知識上知っていたし、友達にもお題目のように唱えていたところであった。そして殺人犯の娘である陽子を愛し、またルリ子を死に追いやった夏枝と村井を赦さなければならぬと思いつつもできない自分の心の醜さを、まるで学者が自己分析でもするかのように見つめていたのである。しかし啓造は「人が、なすべき善を知りながら行わなければ、それは彼に

とって罪である」(ヤコブ書4:17)とある通り、知りながらできなかったので夏枝より啓造の罪はもっと重いと見えよう。知らない者が犯す罪より、知っている者が犯す罪がもっと重いのである。

啓造は聖書に関心を持ち、教会にも足を運ぼうとするが、その中に思いきって飛びこめない自分の姿を見て冷笑する人間である。啓造のようなタイプは、二千年前聖書の文字だけにしぼりつけられたいた律法学者達が、イエスの語った御言葉の深い意味を理解できずに受け入れられなかったように、本当の信仰に至ることは難しいであろう。

啓造は二度も自分を裏切った夏枝を赦せなくて、夏枝に復讐するために佐石の娘である陽子を育てさせる。表面上は「汝の敵を愛せよ」という言葉を実践した聖人のように見られたい虚栄心と、内面では愛して赦すべき妻に復讐するという、完全に相反した二面性を持つ偽善者なのである。もちろん、愛する妻に浮気された男なら、妻を殺したいほど憎む気持ちは、誰もが理解できるであろう。しかし、復讐の道具に無垢な子供を利用するというのは、人道的にも赦されないことである。結局浮気をした夏枝よりも、啓造はもっと多くの人びとを不幸のどん底に落とし入れることになる。息子の徹が成長するにつれて、啓造の胸の中をある予感がよぎるのである。

一途に夏枝の不貞を怒り、佐石の子供を育てさせようと陽子を引きたったための暗い影が、いま辻口家全体をおおっているということ、啓造は思い知らされたような気がした。(結局は、復讐しようとした自分が、一番手痛く復讐されることになるのではないか?) (『氷点』上 p. 320)

この予感は後日見事に当たるのだが、この時の啓造は何かしら自分のとった行動に恐ろしさを感じただけであり、心から反省をするわけではない。ところがある日、啓造の人生観を大きく変える事件に遭遇する。洞爺丸事件¹⁷⁾で九死に一生を得た啓造は、自分の生命の重みを実感し、夏枝を愛し、徹を愛し、陽子を愛し、村井とも仲良く生きていこうと決心する。しかしまたもや夏枝が自分を裏切ろうとしていた事実を知るや否や、その決心は苦痛の中で消え、もとの自分の姿に引き戻されるのであった。こんなことは人間にはよくあることだが、何故そうなるのだろうか。意志薄弱も人間の罪であるが、ここで三浦は啓造が「処女懐胎」の物語を読むかたちで「信じる」ことの重要性を語っている。ヨセフがイエスを懐胎したマリヤを信じられたのは、単にヨセフの

17) 1954年9月26日、台風15号のため、函館港外で沈没し、1155名が死亡した実際に起こった事件。この時、ストーン宣教師が殉教している。

人格によってだけではない。ヨセフとマリヤは神によって一体となっていたから「信じる」ことが可能だったと言えよう。

では「信じる」ということはどういうことなのか。例えば私達は酸素を吸って生きている。ではいつも「ああ、今ここに酸素がある」といちいち感じながら生きているかといえば、

そうではない。また地球は自転しているが、「ああ、今回っている」と感じる人間はいない。酸素があるとか、地球が自転しているということは科学の時間に学んだのでその事実を「信じた」のである。しかし人間は空気や地球とひとつになっているので、そこにはもう、信じる信じないということはあまり必要なことではなくなる。もし酸素がなくなり、地球が自転することをやめたら生きられない我々であるのにもかかわらずだ。だから「信じる」ということは、正しく知り、完全に一体となることだと言えよう。そして神を信ずるなら、神を知り、神と一つとなり、神の御言葉を行なうことが、義とされると聖書にある。¹⁸⁾

ここに神の御言葉である「人がその友のために命を捨てること、これよりも大いなる愛はない」¹⁹⁾という言葉を実践した人物がいる。洞爺丸事件で救命具を他の人に譲って殉教した宣教師の姿が啓造の胸の中に残るが、まだこの時にはそれが何を意味するのか悟れなかった。イエスの十字架の愛をここで考えてみると、愛を投入して忘れ、また投入して忘れ、最後には自分の生命をも犠牲にしたように、啓造は夏枝や村井を赦すべきであった。イエスから直接愛され、イエスの十字架上での死を目のあたりにした当時の弟子達でさえ、イエスが復活した姿を見るまでは、イエスの示した真の愛を実践することはできなかったことから、後に起こる陽子の死と蘇生から、本来の信仰のあり方が示される手がかりとなるものがうかがえるが、真実の愛を受けても、それが愛だとは感じないほどかたくなな墮落した人間の姿がここからわかる。ところで啓造は夏枝を信じることはできなかった。信じるということは愛することであり、赦すということである。妻を信じないこと、愛せないこと、赦せないことが罪なのだということが、啓造には真実の意味ではわからない。しかし三浦は、高木に罪とは何か投げかける言葉を語らせている。

由緒正しいなんていってみたって、みんな人殺しをしたようなもんだ。メカケのいたのや、合戦のたびに殺し合ったのやな。そんなのが一人もいない家系なんて先ずいないだろう？ …… (中略) ……

18) ヤコブ書 2:17~26 参照。

19) ヨハネ伝 15:13 参照。

おれなんて、何十人も何百人も、腹の中の赤ん坊を殺してきたぜ。逃げも、かくれもできない胎児をね……(中略)……法律に反したことでもないから警察にもつかまらない……(中略)……法にふれなきゃ、何をしてもいいのか? (『氷点』下p.24)

啓造も高木のように、世界や人間に対する根本的な洞察力があったら、多くの人間を悲劇に巻きこまずにすんだかも知れない。浅薄な虚栄心のために憶病になった、孤独で哀れな啓造の姿がここにある。洞爺丸事件から十年近くたって、啓造はもう一度聖書をひもといてみる。そしてやっと啓造は自分は醜い人間なのだと認める。啓造や夏枝のしてきたことは法にふれる罪ではないけれども……

「汝の敵を愛せよ」という言葉で自分自身と高木をだまし、実は夏枝に犯人の子を育てさせようとした卑劣で冷酷な人間が自分なのだとすることを、いやでも認めずにはいられなかった。(だれにも顔向けのできないことをしながら、それでもおまえはまだ夏枝を責める心がある) (『氷点』下p.249)

しかし、それでも啓造はまだ完全に夏枝を赦しきれないのである。この啓造の偏狭な性格のため率直に思ったことを言えずに起こった小さな誤解から始まった事件が、家庭に不幸をもたらしたのである。わかっていながらできない人間の姿、つまり自分の本心のままにはなく、結局自分の邪心のままに生きている不自由な啓造の姿こそ、罪ある人間の姿なのである。これは高木や辰子が自分の過去や、犯した罪を率直に告白するのとは対照的に、啓造や夏枝の罪の深さを浮き彫りにしていると言えるであろう。

啓造はその後、陽子に対する不倫の思いを夢の中で見た自分が、つくづく罪深いと思い、自分の心の中を分析している。結局啓造も夏枝と同じように淫乱な思いを持っている人間であるという証拠で、啓造が夏枝を責める権利は一切ないのである。この出来事を通して、夏枝、村井、啓造の三人を同一線上に配置させようとした作者の意図を感じることができる。そしてここで思い起こされるのは、「あなたがたの中で罪のない者が、まずこの女に石を投げつけるがよい」²⁰⁾という言葉である。同じ水準にいる者が、お互いを赦せず、さばき合うのである。それより高い水準にいる者は、相手の不足な面が見えても問題視しないで愛でつつみこむものである。ようやくこ

20) ヨハネ伝 8:7

こに来て啓造は罪の本質について深く考えるのである。作品から引用してみよう。

啓造はつくづく自分を罪ぶかかと思った。そうは思ってもまた、どこのだれよりもやはり自分がかわいいのが不思議だった……（中略）…… 第一、おれ自身がもし一夜の浮気をしたとしても、おれは決して自分を怒りはしない。それなのに妻の浮気は絶対ゆるせないのだ。一体これはどういうことなのだろう。人がやって悪いことは、自分がやっても悪いはずだ。）人のことなら、返事の悪いことでも、あいさつの悪いことでも腹が立つくせに、なぜ自分のことなら許せるのだろう、と啓造は人間というものの自己中心なのにおどろいた。（自己中心とは何だろう。これが罪のもとではないか）（『氷点』下 p.277）

ここで作者は啓造に「自己中心が罪ではないか」と言わしめている。辰子の言葉を通して作品の初頭で、これを暗示している部分がある。引用してみよう。

「もし自分の子だしたら、もし自分だったら・・・というように、いちいち換算しないと、ものごとを判断することができないのね。人間ってものさしがいくつもあるものね」（『氷点』上 p.68）

また、これと同じ言葉が三浦のエッセー「光あるうちに」の中にも書かれている。

わたしたちは自分を「悪人」だなどとは思っていない。罪深いなどと考えたりはしない。「わたしは、人様に指さされることもしていません」わたしたちは常に、尺度を二つ持っているからだ。「人のすることは悪い」「自分のすることは、そう悪くない」この二つの、はかりが心の中にあるからだ。つまり、「自己中心」なのだ。「自己中心」の尺度で、ものごとをはかる限り、自分は悪くないのである。なぜなら、それは、「自分のすることは、そう、悪くはない」というものさしなのだから。それどころか、「自分のことはすべてよい」というものさしを持っている人さえいる。（『光あるうちに』p.29）

結局人間はいつも「我-エゴ」というものにこだわっているから、自分の立場からしか物事を考えられず、自分を捨てきれない故に、自己中心になってしまうのではないだろうか。結局、夏枝も啓造も自己中心の「ものさし」があるので、自分の立場からだけで相手を見ると全て相手はまちがっているようにしか見えないのである。辰子のように、公平な観点から物事を見つめる心の広さ

や余裕が、人間には必要だとも言えるだろう。またお互いが為に生き、愛し合う時に真実の幸福がやってくると言えよう。

しかし人間が墮落したため、親である神から離れ、本来は愛しあはずであった人間関係も失い、自分しか考えられなくなったのである。他人だと思ふから、人の痛みを自分の痛みとして感じられなくなった故に、さまざまな悲惨な事態が起きているということが作品を通して感じられる。

また信じること、愛すること、赦すことは、神抜きにはできないと三浦は言っている。単なる処世術やヒューマニズムでは限界があるだろう。これが三浦文学の優れた点ではないかと思う。啓造の言葉から引用してみよう。

(信頼し合ったことさえ、悲劇になることもある) 啓造は心の中でつぶやいた。お互いに信頼し合いながらも、結局は高木も自分も相手を欺いていたのだと思うと、啓造は背筋の寒くなる思いがした。どこかがまちがっている。信頼とはこんなものではない、と啓造は思った。(人間同志は心の中まで見とおすことはできないからな。これがもし神の前だったら・・・)しよせん、高木も自分も神の前に立つということを知らなかったのだと啓造は思った。(「氷点」下 p.358)

筆者はあえて、神の前に立つというよりも、神の心情に立って考えるべきであると言いたい。前にも述べたように、神は親である。神の心情的な立場に立って考えられないことが自己中心という罪なのであり、それが自分も他の人も不幸にしているのだと言いたい。太宰治は「人間失格」の中で、「神に問ふ。信頼は罪なりや」「無垢の信頼心は罪なりや」と悲痛な問いかけをしているが、三浦はこれに対して明確に「神なき信頼は罪でありうる」と答えていると言えよう。

啓造の罪がもたらしたものは何だったのか。作品の中から引用してみよう。

(何で佐石の娘を、夏枝に育てさせようと思ったのだろう)

(だが、あの時おれは夏枝をゆるすことができなかった)

(と、いって、ゆるさなかったばかりに、誰もかれも不幸にってしまったのではないか。復讐しようとして、一番復讐されたのは自分自身ではなかったか)

(そうだ。陽子を愛することのできない苦しみ、その秘密を妻にかくしていることの苦しみ、ただ苦しいだけだった)

(それだけではない。徹にもすべてを知られてしまったのだ。しかし徹は陽子と結婚するといっ

るのだ) (『氷点』下 p.130)

お互いに最も信頼し、愛し合うべき家族がバラバラになり、苦しみだけが残るのである。これこそ「さばき」であり、罪の代価なのだと思う。啓造の罪は知識万能主義から来る不寛容、つまり批判、解釈、分析はするが、極端な理想主義に陥るとい知識人達が犯しやすい罪であるとも言えるだろう。

啓造の妻や陽子に対する歪んだ愛と、夏枝のひねくれた心に左右される家庭の中で、ただひたすら清く生きようとしたのが殺人犯の娘(本来は不義の子)の陽子である。これから三浦の社会的弱者に対する人間愛を垣間見ることができる。では次に陽子の見つめた偽りのない心の中を探ってみることにする。

4) 陽子の罪意識と原罪

啓造は自分の犯した罪については考えた。しかし陽子は人間の血の中に流れているもっと本質的な罪を見出したのである。これが三浦の言う全ての人間が持っている「氷点」なのである。すなわち「氷点」とは本文において、心が凍えてしまって生きる力をなくさせるものという意味で書かれている。本文「遺書」の中から引用してみよう。

法にふれる罪こそ犯しませんでした。考えてみますと、父が殺人を犯したということは、私にも可能性のあることなりました …… (中略) …… 私の心は凍えてしまいました。陽子の氷点は、「お前は罪人の子だ」というところにあつたのです。私はもう、人の前に顔を上げることができません。どんな小さな子供の前にも、この罪ある自分であるという事実に対して生きて行く時にこそ、ほんとうの生き方がわかるのだという気も致します。私にはそれができませんでした。残念に思いますけれども、私はもう生きる力がなくなりました。凍えてしまったのです。(『氷点』下 p.343)

陽子は自分の血の中を流れる罪を発見し、今まで自分は正しいと思ってきたこと自体も実は驕慢だったということに気付いたのである。陽子が生まれた背景から見て、陽子のように善良で人を思いやる心を持ち、人を憎むことすら知らないような人間が生まれてくるということは、非現実的か

も知れないが、三浦自身の理想的人間像として限りなく善に近い一つのモデルだと言えよう。このようなタイプは、「氷点」だけではなく、「ひつじが丘」の奈緒美、「天北原野」の貴乃のような、清純であるが不幸な重荷を背負っている女性達が見られるのも興味深い。このような善良な陽子にも罪があるなら、他の人間は言うまでもなく、みな罪人なのだと三浦は示そうとしているのであろう。

今まで述べてきたことを整理すると、神と同じ立場に立って考えられない自己中心な心、自分を正当化する驕慢な心、自己が守らなくてはならない位置を離れて自分勝手に無責任な浮気心や虚無感、自分が主管してはならないものを主管する貪欲な心、自己の罪を他人になすりつけ責任転嫁する心が、全ての人間に存在していると言えるだろう。それは原罪に起因すると言えるが、これらの罪に気付かないことが罪であり、そんな自分を自嘲したり、半ばあきらめて生きる「生」も真実なものではないと三浦は語っていると思う。

この作品には何種類かの人間が登場していると思われる。第一は夏枝に代表される自我陶醉タイプ。第二は村井のように感覚的かつ虚無的に生きているタイプ。第三は高木のように人間の醜くさを知りながら「どうせ人間なんて何べん焼き直しても、どうにもならない存在だ」と人間の限界を知って生きるタイプ。第四は辰子のようにヒューマニストで自己実現欲の強いタイプ。第五は啓造のように偏狭な小宇宙の中で葛藤するタイプ。第六は陽子のように純真無垢に、真実を直視しようとするタイプである。これは筆者なりにまとめたものであるが、人間は大多数この六つのタイプのどれかにあてはまりそうな気がする。

「罪を罪と感ぜないことが罪ではないか」という三浦は、こんなにも自己中心で何が罪なのかわからなくなった人間の姿こそが、人間が墮落によって原罪を持つことに起因しており、人間の魂は瀕死の状態に陥っているということを作品を通して訴えようとしていると思われる。水谷昭夫氏が、「皆、自分は無実だと思いこんで生きているが、作品はそのような誤認が人間の悲惨の原因であることを示している」²¹⁾と言っているように、誤認、誤解というものがこの世の中に蔓延しているのも事実であろう。それが人間同志の心を離れ離れにさせることにより、お互いを疑い、一体となれずに孤独になっていく姿は、現代のように物質的に豊かになった社会においても解決されていない人間の真実の姿ではないだろうか。愛し合うべく生まれてきたはずの人間が、互いに傷付け合

21) 前掲書 「三浦綾子—愛と祈りの文芸」 p.49.

い不幸になる原因は、全て自己中心から起こるのだということを作品を通して理解できるであろう。

そしてお互いに和解し、赦し合う必要性は感じて、それを真実に悟って実践できる人間はほとんどいないということを三浦は語りたかったのではないだろうか。陽子の罪は前に述べた夏枝、村井、啓造らの罪とは異質なものである。即ち個人だけではなく、自分の血の中に流れる遺伝的な罪の概念を持っているということが大きな特色である。そしてそれは原罪と連がるものであるということ、罪や虚無感を解決しようと死を選択しても何の解決にもならないということを三浦は作品の中で語っている。この作品では一つの家庭を通して起こった悲劇的な内容を示しているが、家庭の中で解決できないことはそのまま社会に、国家に反映されていくのである。

三浦が恐れるのは、人間の醜さや不幸を書く時、読者がそのことによって「人生に幻滅し、絶望する」ことである。²²⁾ これは『続氷点』で示されるキリストの愛と救いの問題につながっていくが、筆者は真の愛と理想の家庭像という内容で後に述べようと思う。



22) 久保田暁一(1996)、『三浦綾子の世界』和泉書院、p.40。

Ⅲ. 「氷点」での死の意味

「罪の支払う報酬は死である」²³⁾ という聖書の言葉がある。この死は靈魂の死を示したものである。また「その死人を葬ることは、死人に任せておくがよい」²⁴⁾ とも聖書にあるが、初めの死人とは、肉体的に死んだイエスの弟子の父親のことであり、二番目の死人とは、肉体は生きているが、イエスに従わないで悪魔の勢力圏内にいる、靈的に死んだ状態の人間を意味する。故に人間の「死」には肉体的な死と、靈的な死があると考えられる。何故なら人間は靈肉合一体だからである。また筆者は靈的な「死」はアダムとイブの墮落によって招来されたと思いたい。そして肉体的な死はもともと全ての人間に平等に与えられているものであると思いたい。

ところで「氷点」における「死」には、ルリ子の死、佐石の死、洞爺丸の乗客達の事故死、宣教師の殉教、啓造の患者である正木次郎の自殺、新聞記事に出ていた開拓未亡人の生活苦を悲観した一家心中、そして陽子の自殺が挙げられる。

ルリ子の死は大人達の自分勝手な行動が原因となって引き起こされた、あまりにもはかない死であると言えよう。この冒頭に起こった不条理な死が、この作品全体に死のイメージを浸透させていくのである。ルリ子の死と同時に、夏枝の奏でるピアノ線が切れる不吉な環境設定から見て、夏枝が奏でるメロディーが何か死を呼ぶメロディーのようでもある。またルリ子が死んで七年ぶりにピアノを弾きたくなった直後、啓造の手紙を読んで陽子の出生の秘密を知った夏枝が、陽子を殺そうとする場面から見ても、ピアノはまるで夏枝の家庭に不幸を呼ぶパンドラの箱のように感じられる。そしてその後、キーを失くしたといってフタが開けられることなく辻口家の応接室に置かれているピアノは不気味な存在である。そしてまた、次に不幸がいつこの家庭を襲うかもしれないという危機感さえも感じさせている。またこのピアノは、エデンの園に生えていた善悪知る木のようにも感じられる。村井も辻口家に不幸を呼ぶ象徴のようであるが、エデンの園が辻口家で、善悪知るの木がピアノで、蛇が村井で、イブが夏枝のようなイメージがある。

佐石の自殺にはいろいろな理由があるだろうが、不幸な人生を送ってきた末に、妻に死なれて

23) ロマ書 6:23。

24) ルカ伝 9:60。

幼ない赤子を抱えた生活に疲れきった佐石が、最後には殺人者となり、人生に疲れきった末での自殺だと言えるだろう。

洞爺丸の乗客達の事故死は、自然災害による突発的な死であろう。人生にはこのように予期しない事件が少なからずあるものだ。それらは決して他人ごとではなく、いつ自分の身に起こるとしても不思議ではない。啓造が遭難した時の心理描写を作品から引用してみよう。

死ねないと思った時、死がにわかに恐ろしくなった。冷静さが失なわれた。いつか啓造は手足を動かしていた。死に面したいま、地位も医学も何の役にも立たなかった。死に対して何の心がまえもなかった。いままで医師として数多くの死を見てきたはずであった。しかしそれは、他人の死であった。自分のこととして見た死ではなかった。いま、啓造は全く無力であった。

(「氷点」上 p.363~364)

このように死に対して何の知識もなく、無力感を感じる人間の姿を通して、我われは何を悟るべきなのだろうか。結局人間はどうかたちであれ、いつかは死ぬ存在であるから、死をどのような気持ちで迎えるのが重要なのではないだろうか。啓造はこの世では、持てるものは全て兼ね備えている人間である。しかし自然の驚異や死の前では、全く無力な存在である。人間は死ぬ時に、財産や地位、権力など持って行くことはできないのである。啓造は生きるむなしさを感じて、後日心の中でこう語っている。

啓造は自分の生きてきた道をかえりみて、ひどくむなしかった。何をめあてに生きてきたのかわからなかった。(人間は何を目標として生きるべきなのだろう。おれには社会的な地位も、一応の財産も、美貌の妻もある。しかしそれらは必ずしもおれを幸福にはしなかった)(「氷点」下 p.212)

死がいつやってきても不思議ではない絶望の中で、三浦が出合ったものは、神とキリストの愛であった。三浦はその愛によって、死の床から不死鳥のように蘇がえったのである。その愛こそ持てるもの全てを投げだしても、代えることができないほど尊いものではないだろうか。啓造と比較される宣教師が見つめながら生きてきたものは、この永遠不変なる価値を持つ、神とキリストの愛であっただろう。我われも決して消えることのない、天に持って行ける永遠な宝物を持つべきだと三

浦は語っていると思う。

ところで多くの人びとの犠牲の上に啓造は運良く助かったが、今私が無事に生きているのも、何らかの犠牲の上に立っていると考えるべきなのかも知れない。我われ一人一人は、厳しく重い生命を注ぎこまれた尊い存在なのだと考えることが重要だと、三浦は訴えかけているようだ。また啓造が真っ暗なあらしの海の中を、もがきながら必死で生きようとしている姿は、人間が人生の苦海を生きていく姿に似せて描写したようでもある。

宣教師の殉教は、この作品の中でただひとつ、人びとに愛と希望を与える死であるだろう。何の迷いもなく自分の救命具を見ず知らずの乗客に差し出す姿は、読者にすばらしい感動を与える。彼には啓造が感じたような死に対する恐ろしさはなかったであろう。同じ死ぬなら、このような価値のある死こそが、いつまでも人間の心に残るものであろう。たとえ宗教や国が違って、我々の心に強く影響を残すものがある。

ところで正木の場合はどうであろうか。父母も兄弟もあり、銀行員でもあり、はた目には何の問題もないような環境にあった彼が、なぜ自殺しなければならなかったのだろうか。正木の遺書から引用してみることにする。

「ぼくは何のために生きていくのかわからなくなりました」

「結局人間は死ぬものなのだ。正木次郎をどうしても必要だといってくれる世界はどこにもないのに、うろろう生きていくのは恥辱だ」（『氷点』下 p.204～205）

正木は人生の目的も見つけられなかったため自殺を選んだ。これは虚無から来る「死」であり、存在の根源から来る哲学的な「死」であるともいえるだろう。そしてその虚無を補ってくれるものとして、「愛」というものの重大さを陽子の言葉を通して三浦は語っている。

（結局は、その人もかけがえのない存在になりたかったのだわ。もし、その人をだれかが真剣に愛してしてくれたなら、その人は死んだらうか）（『氷点』下 p.205）

「ええ、わたしも自分がこの世でかけがえのない存在だということが、よくわからないの。本当はどんな人間だってみんな一人一人かけがえのない存在であるはずなのに、実感としてはよくわからな

いの。 だれかが心から陽子はかけがえのない存在だよってくれたらわかるかも知れないけれど
…… 正木さんって方も、だれかに強く愛されていたら、死ななかつたと思うの」
(「氷点」下 p.207)

正木は真実の愛も、人生の目的もわからず、虚無に陥って死んでいった。このような状態を「魂が病んでいた」と啓造は表現した。正木は肉体的な死に至ったが、心がすでに死んだ状態であったからたとえ自殺をしなくても、生きた屍と同じことだろう。これは現代人の多くが陥っている精神的な病、即ち「死に至る病」なのではないだろうか。

自分なりに仕事や生活に、情熱を持ってとりこんでいるつもりでも、心の奥底を偽らずに冷静に分析してみると、どこかで魂の渇きを感じられるのが事実ではないだろうか。正木の自殺は「氷点」のストーリーの展開上、それほど影響を与える内容ではない。しかし新聞連載中に読者からの投書などで、正木の自殺は三浦が思っていた以上に、多くの反響を呼んだことから見ても、これは現代人に非常に共感できる内容であることは間違いないようである。

啓造においてもしかりである。彼は医師という職業に生きがいを持っていたし、誇らしくも思っていたのに、突きつめて考えるとむなしい思いがするのである。肉体の病は治せたとしても、靈魂の病を治療できない、医師である啓造の限界があるのである。そして夏枝や村井も虚無感を満たすために、戀愛に刺激を求めたが、結局はそれにも満たされることがない内容を見る時、破滅を予期させるような「死のにおい」が作品のあちこちに漂っているように思われる。その「死」はたとえ肉体的な死に至らずとも、靈魂の安息がなくなきまよう、精神的死に陥っている現代人の群像を垣間見ることができるのである。三浦は「氷点」を執筆しながら、登場人物達が神の方を向いてくれることを願ったというが、人生の目的を考えるにおいて、靈魂の安息という問題を考えなくてはならないことを読者に訴えているように思われる。次に開拓農家の未亡人の一家心中の事件が新聞記事に出ていたのは、陽子が自殺する数日前のことである。この夫人の自殺の動機は、佐石や正木の動機とは違うが、陽子の自殺の動機と多少似ている点があるように思われる。啓造の思いを引用して、それについて考えてみたい。

啓造はしかし、この未亡人は何がきっかけでも、死んだのではないかと思った。女手ひとつの開拓農家の生活の中で、二万円の現金を握るということは、死にものぐるいの生活ではなかつたかと

啓造は思った。一生懸命に働きながら、この人は疲れきっていたのだらうと想像できた。ある限りの力をふりしぼって走っている時には、小さな石につまづいても、もう起き上がる力はないのではないかと思われた・・・(中略)・・・一人の人間が死のうとする時には、他の者がうかがい知ることのできない、絶望があるにちがいないと啓造は思った。(『氷点』下 p.316～317)

夏枝はたった二万円程度の金を盗られたぐらいで一家心中するなんて、わがままな話としか受けとれないと言っている。これは夏枝が自己中心で幼稚な性格のため、他人の立場に立って考える思いやりのないことから理解できないのである。陽子は自殺する人の気持ちはよくわからないと言い、自分は絶対に死なないと言っている。陽子もこの未亡人のように、誠実に一生懸命に歯をくいしばって生きているから、その時に死ぬことなど考えられないのであろう。この未亡人も、自分が自殺するなどとはおそらく考えもしなかったのではないだろうか。陽子が一途に生きる姿は、昔三浦が幼い時、牛乳配達をしていた姿や、情熱をかたむけて子供達を教えていた姿と重なって見える。しかし終戦後、三浦が人生に失望して自殺未遂した事件や、作品の中で何度も自殺の場面が反復されることから、陽子が自殺するであろうことは容易にうかがえるのである。

次に陽子の自殺の場合を考えてみよう。もちろん夏枝や啓造らの仕打ちによって受けた心の傷が原因として考えられるが、罪の根本について悩んだことが最大の原因であるだろう。罪を他人や社会に責任転嫁せず、ただ一人で全ての責任を負い、純白の雪が積もる中、薬を飲んで死のうとする陽子の姿は、あまりにも美しく、清らかである。陽子自身何の罪も犯さなかったが、他者の罪を背負って死んでいく姿は、イエスが何の罪もないのに人類の罪を贖うために、十字架にかかった姿をモチーフにしているようである。また、贖罪のための子羊のようなイメージでもある。

ところで『氷点』の舞台になっている見本林は、三浦に名伏し難い感動を与えたようである。そこで三浦は静寂さと無気味さを感じ、真っ白な雪の上に黒いカラスの屍がおびただしく散らばっているのを見て鮮かな印象を覚えたそうだ。その場面がそのままルリ子の死の場面と、陽子の自殺未遂の場面で描かれているのは興味深い。

夏枝はふらふらと歩き出した。滅多に陽の当たることのない林の中の路は、やわらかく湿っている。そのやわらかい土の上を歩くと不安が足もとからのぼってくるようであった。窪地に入ると夏枝は何かにつまづいた。みるとカラスの死骸だった。カラスの羽がその周囲に散乱していた。いやな予

感がした。(「氷点」上 p.27)

この見本林の描写は、殺人事件が起こる暗いイメージを見事に表現していると言えよう。ところが陽子の場合は黒い土の見える見本林ではなく、純白の雪の積もった見本林である。同じようにカラスの死骸はあるが、雪の白さとカラスの黒さが対照的になっていて、ルリ子の時のように暗く重苦しい雰囲気はなく、氷ついた美しささえあるのがおもしろい。

ドイツーヒの林の中に入ろうとして、陽子はハッと立ちどまった。吹きさらされて固い雪の上に、カラスがおびただしく落ちていた。白い雪の上に死んでいる黒いカラスは美しくさえあった。陽子は息をつめて、カラスをみた。あたりに生きたカラスが一羽もないのが、ひどく淋しかった。

(「氷点」下 p.347)

真っ白い雪は無垢を表象し、黒いカラスは罪を表象したものではないだろうか。無垢な清らかさの中で、罪が消えていくように三浦も陽子もそれを願ったのではないだろうか。またルリ子と陽子が川原で死んでいくのも興味深い。この世とあの世の接点を表しているかのような川原で、ルリ子は二度と帰らぬ人となり辻口家に不幸が始まったが、陽子は生きかえるきざしが見えるところでこの作品が幕を閉じることから、今後の辻口家に何か希望を感じられるようである。

陽子は偽りなく自分の真実の姿と向き合った結果、自分は死すべき存在だと悟ったのである。このように善のかたまりであるかのような美しい陽子にさえ、罪が存在するなら、誰がまともに顔を上げて生きることが出来るのだろうか。三浦はここで、全ての人間は罪人であり、死すべき存在なのだという原罪の概念を導入していると思われる。

陽子は遺書の中でこう語っている。

今、「ゆるし」がほしいのです。おとうさまに、おかあさまに、世界のすべての人びとに。私の血の中を流れる罪を、ハッキリと「ゆるす」と言ってくれる権威あるものがほしいのです。

(「氷点」下 p.343)

陽子が求めたものは人間的な「ゆるし」でなく、絶対的な「ゆるし」である。「愛」と「ゆる

し」はお互に通じるものである。絶対者である神からの「愛」と「ゆるし」を望んでいるのである。しかし陽子は罪を乗り越えて生きていくところに、ほんとうの生き方があるにもかかわらず、自ら死を選んでしまった。もちろん自殺は何の解決にもならないし、生き残った者にまた別の重荷を背負わせるようなものであるとも言えよう。陽子はどんなに苦しいことがあっても、石にかじりついてもひねくねせずに自分本来の姿を失わないと心に決めていた。また自分は殺されても生きているかも知れないほどの生きたがりやだと言いきったのに、自殺をした。確固不拔たる人間であったとしても、人生は謎に満ちているものであるから、自分でも予想していなかった結果が起こることは、まああるだろう。即ち人間は、いつどんな事態に陥るかわからない不確実性の中で暮しているのである。突然の不幸な事態に、人間の心の弱さが表れる展開が作品のいたるところに見られるが、前に述べた宣教師の生き方の中に、これを乗り越える道があるということを三浦は示しているのではないかと思われる。「氷点」ではこの人間の根源にある「生」とは何であるのかを執拗に追求しているのである。

そこで「人はまぎれもなく自分と向きあったとき、果たして生きることに耐えうるかという問いがのこされた」²⁵⁾が、罪を乗り越えて、生きる目的を知ってこそ人は真実に生きていくことができると三浦は語っていると思われる。それを「ゆるし」という言葉で作品の中で表現されているが、日本人や非クリスチャンからは、キリスト教の普遍的な教理である「イエスの十字架の救いをただ信ずればゆるされる」という言葉は、非常にとっつきにくく、あまりにも安易な価値判断に見えるだろう。原罪を解決することは、神とキリストの権能で可能であるが、原罪から派生するさまざまな罪を解決するのは人間の責任であると思うので、罪を解決するということは、そんな簡単なものではないと考える。また「信じる」ということは、イエスの御言葉である「真の愛」を実践することに他ならないだろう。そこで筆者は「氷点」の中で、作者が訴えようとしている人生の目的と真の愛を究明するために、三浦の他の作品を補いながらそれに基づく真の家庭像を導き出し、三浦の愛のメッセージを明らかにしていきたい。

25) 前掲書『三浦綾子—愛と祈りの文芸』p.50。

Ⅳ. 「氷点」に見る人生の目的と愛

「氷点」の中で、人間にとって「なくてはならぬもの」という言葉が何度か繰り返されていることから、これが作品の中で重要な概念として流れていると筆者は受けとった。そこで「なくてはならぬもの」の意味から人生の目的と愛を追究してみようと思う。

キリスト教のみならず、全ての宗教が解いているところは「愛」であるといっても過言ではない。また、「愛」は人生や文学のテーマの中で目立つものと思われる。そこで筆者は「氷点」でも「愛」がテーマになっているものと見たい。人間にとって「なくてはならぬもの」とは何かと、作者が登場人物達に考えさせている部分を作品の中からとり挙げ、三浦の伝えたい「愛」について考察してみることにする。

「氷点」の中で陽子が正木次郎の自殺を聞いて、だれかに強く愛されていたら、自殺しなくてもよかったのではないかと愛の重要性を語っている。また、啓造が教会の前まで行って、自分にとって「なくてはならないもの」とは何かと考えている場面もある。

(神はこの世を愛して下さったと書いてあったが、ほんとうに神は人びとを愛しているのだろうか) 神に愛されるには、あまりにも醜いと啓造は自分の心の中を考えていた。(「氷点」下 p.254)

上の文から推察してみると、啓造は神の愛に確信を持っていないことは確かである。若い頃から聖書に親しみ、聖書の文句は知ってはいた。しかし、知識人的な懐疑心が根本にある態度で受け入れていたので、キリスト教の本質である「神の愛」とは隔たりがあった。そんな啓造であるから、いつも自分の弱さに負けてしまう場面が、いたるところに見つけられるのは当然である。故に、愛されていると確信することほど、人間を真実に強くするものはないと思う。

また啓造とは対照的に「氷点」の中では、洞爺丸台風の時、行きずりの人のために、自分の生命までも犠牲にして殉教した宣教師の姿が描かれている。即ち、罪人のために生命を捨ててまで、真の愛を示してイエスの姿の再現である。これこそイエスを通して顕れた神の愛であり、現実世界での愛の実践である。それは「真の愛」「無償の愛」「与える愛」「犠牲の愛」

「永遠の愛」というように、いろいろな言葉で表現できるであろう。「自分の命を救おうとする者はそれを失い、それを失う者は、保つのである」²⁶⁾ という聖句のように、宣教師は殉教というかたちで「神の愛」を示した。三浦は啓造の口を借りて、「殉教した宣教師のように、おれは生きたいのだ」と言っていることから、「神の愛」を実践することが、真実の生き方であると読者に訴えようとしていると思われる。殉教という極端なかたちで肉体的な犠牲行為までしなかったとしても、自己を否定して他者の為に生き、愛することの重要性を呼びかけていると思う。そして前にも述べたように、宣教師の見つめて生きていたものは、永遠不変で、天にまで持って行ける宝物である。そこで筆者はこれから「神の愛」を「真の愛」という言葉で表現することにする。

ところで、社会を構成する最小単位は家庭であるから、家庭の重要性に注目してみたい。では「真の愛」は家庭の中でどのように具現されるのであろうか。一般に我々は、父母の子女に対する愛が、それに最も近いと言う。何故ならそれは代価を求める愛ではないからである。しかし家庭を維持する為には、母子あるいは父子間だけではなく、この「真の愛」は夫婦、兄弟間にも拡大される必要があると思う。これらの家族間での愛情が円満に授受されることによって、人間は幸福を感じることができ、そのような家庭で育った子供達が社会に出ていけば、自動的に社会も円滑に回転すると思える。そこでまずはじめに、「氷点」において、夫婦間で問題となっている部分を探し、そこから理想的な夫婦像を導き出すことにする。

「夫婦なんて、ますますわからんもんだよ。長年住みなれたわが家に、まだ自分の知らない部屋があったような、そんな不気味なわからなさがあるよ。夏枝は、ルリ子と同じ年ごろの子をだいたりしてね、わからんな」（「氷点」上 p.106）

しかし靴下をはく呼吸はぴったり合っはいても、今二人の心はどこかでいちがっていた。夫婦の夜の生活も、この靴下をはく呼吸のように、いわば熟練で合っているようなものかもしれないと啓造は思った。（夫婦の本当の結びつきは、体以外の、もっと心のふかいところで、ぴったりと合うものではないだろうか。おれたちには今、性生活以外に共鳴し得るものを、持っているだろうか）（「氷点」上 p.187）

26) ルカ伝 17:33.

人間には心と体があるのだから、夫婦の結びつきも心と体の両面が必要であろう。しかし体だけの結びつきだけでは、相手が何を考えているのか理解できないし、不気味な存在とひとつ屋根の下で、隣り合って寝ていること自体が、奇妙に思えるのである。三浦はエッセイ『この土の器をも』でもこのように語っている。

わたしは、夫婦の結合が肉体のみにあるとは考えたくなかった。やはり祈りによる人格と人格の結合が、根本であらねばならぬと思っていたからである。(『この土の器をも』 p.8)

では夫婦の心がくいちがった状態を、どうやって打開すればいいのであろう。「氷点」で辰子は「この家族はもっといいことをいわなければだめになる」と言って、この家庭の問題点を把握している。つまり、対話の不在が問題を大きくしているというのである。

啓造も夏枝も、本当に重大なことは自分の胸のうちでうずまいていながら、相手に打ちあけることはできないのである。自尊心を維持するためかもしれないが、こういう場合の自尊心は真の自尊心ではなく、歪曲された弱さと言えるであろう。ここで家族間の対話の必要性が挙げられる。お互いの心を知り、配慮することがなければ、小さな誤解が大きな悲劇になってしまうということを三浦は語っていると思う。言いかえれば、コミュニケーションの重要性の認識が見られる。ここでいう対話とは感情のはけ口としての道具ではなく、相手と自分に対する理解をもとにした認識が必要であるし、ひとつになれるだけの説得力も必要であろう。

啓造は、次第に気がめいっていった。先ほどからいった言葉が、そのままギッシリと胸につまったような、重い気分沈んでしまった。うだけいっても、胸は少しも晴れてはいない。(これだけいっても、夏枝は何も答えない。やっぱり村井と夏枝は・・・)

十一年前の思いを洗いざらいいったあとには、ただ孤独だけがあった。黙然として何の応答もなくかたくなに座っている夏枝を啓造は見た。十六年間連れそった妻とは思えなかった。これだけいっても通い合うものは何もないのかと、啓造は腕組をして林をみた。冬日があかるく林の上にあった。明るい日ざしの下にみにくく争う淋しさを啓造は感じた。十六年の結婚生活に、一体自分たち夫婦は何を築き上げたのかと思わずにはいられなかった。徹という子供はいても、ちょっとつくとガラガラと音をたてて崩れるような、もろい家庭しか築いていない。(よそ目には、幸せそうな夫婦に見えていたかも知れないが・・・)とにかく心の底をぶちまけていま得たものは、他人よりも遠い二人であった

ということだった) (『氷点』下 p.121)

啓造が把握した夫婦の実状は、「他人よりも遠い二人」であるという認識である。結局啓造は自分は正しいけれども夏枝は間違っているという自己中心的な立場で、ただ感情的に相手をさばき、攻撃したに過ぎない。かたよった立場で言いたいことを言っても、相手はそれを受け入れないので、虚しさだけが残り、ひとつになるどころか決裂してしまう可能性があるのである。相手をさばくそのさばきで、結局自分がさばかれるのである。このようなアイロニーが『氷点』にはいろいろな形で表われている。ではどんな対話が必要なのだろうか。「何事でも人びとからしてほしいと望むことは、人びとにもそのとおりにせよ」²⁷⁾とイエスは語ったが、自分を理解してほしいと思うならば、まず相手を理解しようとする姿勢が必要なのではないだろうか。そうすれば、夫婦のみならず、他の人間関係もスムーズに展開していくであろう。

また、よそ目にはすばらしい家庭であるかのように見えていても、裏腹の実状が展開されているのが作品の世界である。

それまで、徹にとって自分の家庭は誇りであった。病院長である、おだやかな父、美しくやさしい母、明るく、かしこい妹、そして生徒会長の徹自身、申し分のない家庭のはずであった。それが一皮むくと、卑劣な嫉妬深い父であり、不貞な母であり、殺人犯人の娘が妹であった事実、徹は深く傷つけられた。(『氷点』下 p.129)

よそ目には、円満な家庭と思われながら、生活してきているということが、考えてみると不思議だった。案外どこの家庭にも夫の不貞、妻の浮気、嫁姑の不仲、子供の非行など、人には聞かすことのできない恥ずかしい話があるのかも知れない。けれども人びとは、何とか一応の体面を保っているのかも知れない、と啓造は思った。その、かくされたドラマが、何かの動機で自殺、家出、殺人、離婚などという形になった時、世の人びとははじめてそのことに気づくのではないかと思うと、啓造は今更のように、陽子を引きとった自分が恐ろしい人間に思われた。(『氷点』下 p.276)

三浦は『積木の箱』でも、妻妾同居の富豪の家庭の人間模様を通して展開される、さまざまな偽りの姿を見せている。結局このような偽りの世界は、もろく崩れていくのが当然ではないだろ

27) マタイ伝 7:12。

うか。啓造の家庭における状況は、薮貞子氏が言うように、現実では考えられない愛憎劇だ²⁸⁾ととらえる読者もいるかも知れないが、家庭の外面と内面の次を強烈に描くことによって、真人間や家庭にとって何が必要なのか読者に深く考えさせたのは、キリスト教作家ならではの智慧を感じさせるものがある。三浦の作品を護教文学だと批判する評論家もいるが、桑原武夫氏が「日本の明治以来の小説がつまらない理由の一つは、作家の思想的社会的無自覚にある」²⁹⁾と言ったように、西洋文学では支配的なキリスト教思想を排除して、偉大な作品をどこまで書けるかという、はなはだ不確実なのではないだろうか。

『氷点』において最大の犠牲者は、このような偽りの家庭に育った陽子や徹であると言っても過言ではないだろう。三浦の子供達に対する愛情は、ひとかたならぬものであると、久保田暁一氏も評論の中で語っている。

生徒を厳しく、優しく愛した彼女は、教師として接した薄幸な少年を作品の主人公に登場させたり、子どもたちへの熱い思いが深く作品に注ぎこまれており、子どもたちの生活と運命を傷つけ歪めるものに対する批判となって表われている。³⁰⁾

家庭における父母のあり方が、子供の人生を左右するのは周知の事実であるが、互いを尊重し、愛し合う姿を見て育った子供こそ、幸福な人生を送られるのではないかと思う。また、作品の中で「不機嫌」についても言及されている。

夏枝は久しぶりに、きげんのよい笑顔を見せた。その笑顔を見ると、他愛なく啓造の心も軽くなった。啓造は妻のきげんの好しあしに左右される自分を、なさけないと苦笑した。しかし、人間というものは案外、同じ屋根の下に住む者の影響を、このように強く受けているのかも知れないと啓造は思った。ゲーテか誰かの、「不機嫌は、最大の悪だ」とかいった言葉が思いだされた。この世界的な人間でさえくふきげんな奴>にはこっぴどく悩まされたにちがいない。そのくふきげんな奴>が彼の妻だったかも知れないと思うと、啓造は少し慰さめられた。(『氷点』 上 p.328～329)

28) 薮貞子(1988)、『小説の中の女たち』北海道新聞社、p.197。

29) 桑原武夫他(1979)、『現代日本文学大系74 中島健蔵、中野好夫、河盛好蔵、桑原武夫集』筑摩書房、p.327。

30) 前掲書『三浦綾子の世界』p.49～50。

「不機嫌」というのは漠然と感じる異様な一体化できない不快感であり、自閉的でありながら、純粹な隔絶と孤独を選び得ないものである。人間は感情を持った存在であるから、「不機嫌」な場合もあるだろう。しかし、その感情をぶつけられた相手の心情はどうであろうか。自分が甘えられる相手に「不機嫌」をぶつけるが、ある意味で人間の弱さがその原因であるだろう。しかし、自分にとって最も大切である配偶者や家族に、不愉快な思いをさせるとすれば、まさしく家庭地獄であり、お互いが怨讐でしかないであろう。愛し合って結婚し、愛の結晶として子女が生まれてくれば、当然そこには愛の家庭が作られなければならないのに、そうではない場合が多くあるのではないだろうか。結局自己中心的な愛が出発点となっているから、さまざまな問題が生じてくるのであろう。

三浦は「光あるうちに」の中で、聖句を引用しながら、〈愛〉という言葉のかわりに、〈私〉という言葉を入れてみると、どんなに私たちが愛のない存在であるか、よくわかるという。

愛は寛用であり、愛は情深い。また、ねたむことをしない。愛は高ぶらない、誇らない、不作法をしない、自分の利益を求めない、いらだたない、恨みをいだかない、不義を喜ばないで、真理を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える。(コリント I 13:4~7)

「真の愛」とはこのような愛を言うのであり、このように生きることが、真の人間となる道であるだろう。この言葉通りに我々が生きようとするれば、大変な葛藤と、挫折感の連続であるかも知れないが、「いつまでも存続するものは、信仰と希望と愛と、この三つである。このうちで最も大いなるものは愛である」³¹⁾とパウロが言ったように、愛がなければ、人間は人間ではありえない、全ては虚しいものになってしまうであろう。

「真の愛」を知り、「真の愛」を実践することが、生きる目的であるなら、我々は長い階段を一段一段登るつもりで、絶えまなく努力する必要があるのではないだろうか。「氷点」の最後で、陽子が蘇生する気配を見せるところで幕を閉じるが、イエスの復活を思わせる雰囲気、読者は何か希望を感じるであろうし、周囲の人びとの愛で生かされた陽子が、大いなる者の力で生かされ、「真の愛」をつかむ可能性を見せてくれているように感じるだろう。

「なくてはならぬもの」とは、即ち「真の愛」である。この「ために生きる愛」によってのみ許

31) コリント I 13:13.

し合い、相手を心から受け入れることによって、お互いを理解し、ひとつになれるのだと思う。それには当然自己犠牲がともなうが、この価値あるものを得るために、我々が支払う犠牲とは比較にならないものを神は常に人間のために備えてくださるというメッセージを通して、三浦がクリスチャン作家であることを立証していると言えよう。そして人間はどんな悲惨な環境に置かれたとしても、「真の愛」により真実に強く生きていくことができるのだと言えよう。



V. 結 論

今まで『氷点』を「罪」と「死」と「愛」を中心概念として考察してみたが、この作品には三浦綾子の社会意識が強く反映されていることがわかった。戦前の天皇を中心としたイデオロギーと、戦後の価値観の崩壊のよって自己のアイデンティティーを喪失してしまった三浦の苦しみが、同時代人の苦しみとして反映されていると見た。それが『氷点』の登場人物らの彷徨する人間像に表われている。例えば佐石や正木などの傷付いた魂を持った存在にも同情が見られる。佐石は孤児になって悲惨な生活をしてきた挙句、殺人者となり自殺をして果てたし、正木はそれなりに良い環境ではあったが、自分を必要としてくれるものは何もないと言いながら、人生に失望して自殺した。

三浦は登場人物達に対して非常に深い関心と愛情を持って心理描写しているが、作家自身悲惨な経験をしてきただけに、殺人犯の佐石に対しても何か同情できるものがあるのではないだろうか。そこには社会的弱者に対する同情と、権力者に対する反抗心があると言ってもいいだろう。

ところで三浦は絶望と彷徨の中でキリスト教の信仰によって魂の救いを得て、自己の存在意味を獲得したのである。それでキリスト教思想を中心に作品を書きながら、人間の「生」における「罪」と「死」と「愛」の問題が密接にからみ合い、それを克服するために如何に人間が生きるべきなのかを訴えていることがわかった。つまり「ために生きる真の愛」を中心とする理想的世界を追求しているが、三浦はそれが家庭から出発するということを『氷点』の中で語っているとされた。『氷点』においては家庭の悲劇が描かれているが、これらは人間のエゴイズムに起因するものである。これを「愛」と「ゆるし」で克服することによって、理想的な家庭や社会が訪れるということを語っていると言えよう。そして北原が陽子がたとえ殺人犯の娘であったとしても愛すると言う場面や、陽子が蘇生するきざしを見せて作品の幕が閉じる場面から、愛によって生かされる希望を感じるのである。

三浦綾子の作品は全般的に「罪」や「神の愛」をテーマにしたものがほとんどである。三浦は惜しくも1999年10月12日にこの世を去ったが、彼女の作品は、善悪の価値観が混沌としている現代社会に射す一筋の光のように希望を与えると共に、今後多くの研究者によって三浦文学の真価がより明らかになることであろう。

参 考 文 献

1. 日本文献

(TEXT)

三浦綾子(1997)、「氷点」、上、下 角川書店。

(単行本)

三浦綾子(1995)、「石ころのうた」、角川書店。

_____(1995)、「天北原野」、上、下 新潮社。

_____(1995)、「ひつじが丘」、角川書店。

_____(1997)、「道ありき」、新潮社。

_____(1997)、「この土の器をも」、新潮社。

_____(1997)、「光あるうちに」、新潮社。

_____(1997)、「積木の箱」、上、下 新潮社。

_____(1998)、「生きること思うこと」、新潮社。

_____(1999)、「三浦綾子対話集4—共に歩む」、旬報社。

小幡陽次郎他(1992)、「名作文学に見る「家」」、朝日新聞社。

久保田暁一(1992)、「日本の作家とキリスト教—二十人の作家の軌跡—」、朝文社。

_____(1996)、「三浦綾子の世界—その人と作品」、和泉書院。

黒古一夫(1994)、「三浦綾子論—「愛」と「生きること」の意味」、少学館。

桑原武夫他(1979)、「現代日本文学大系74 中島健蔵、中野好夫、河盛好蔵、桑原
武夫集」、筑摩書房。

佐古純一郎(1993)、「三浦綾子のこころ」、朝文社。

辻橋三郎(1978)、「近代キリスト者文学論」、雙文社。

水谷昭夫(1989)、「三浦綾子—愛と祈りの文芸」、主婦の友社。

_____(1986)、「三浦綾子の生涯と文芸—燃える花なれど」、新教出版社。

数貞子(1988)、「小説の中の女たち」、北海道新聞社。

山崎正和(1992)、『不機嫌の時代』、講談社。

日本聖書協會(1974)、『聖書』(口語訳)。

(辞典)

村松定孝他(1990)、『現代女性文学辞典』東京堂出版。

2. 韓国文献

(単行本)

고니시 진이치(1995)、『일본문학사』、고려원。

라이셔워(1978)、『日本帝国興亡史』、瑞文堂。

르네 웰렉외(1988)、『文学의 理論』、乙酉文化社。

마이빈 토케이어(1986)、『탈무드』、太宗出版社。

世界基督教統一神靈協會(1995)、『原理講論』、成和出版社。

최재철(1995)、『일본문학의 이해』、민음사。

헨리 리 토머스외(1983)、『위대한 宗教家들』、종로서적。

S.A.Kierkegaard(1977)、『죽음에 이르는 病』、三中堂。

(論文)

金潤鐸(1995)、『三浦綾子の作品に見られる<原罪>と<ゆるし>に関する一考察- 『氷点』と『続氷点』を中心に-』、誠心女子大学校 大学院。

慎重玉(1990)、『結婚과 性에 関한 基督教 倫理的考察』、中央大学校 教育大学院。

(辞典)

종교학사전편찬위원회편(1998)、『宗教学大辞典』、한국사전연구소。

(1993)、『브리태니커大百科事典19』、한국브리태니커회사。

<Abstract>

『Hyo-ten』 of Miura Ayako

- Connected with sin, death and love -

Hosomi, Noriko

Japanese Education Major

Graduate School of Education, Cheju National University

Cheju, Korea

Supervised by Prof. Kim, Nan-Hee

In *Hyo-ten*, the first novel of Miura Ayako, we considered the main idea as sin, death and love. This paper is to find out what brings this tragedy to the family, focusing on the family tragedy of *Hyo-ten*. As each character in the work has the original egoism inside themselves, the writer let them deepen the desire.

In Chapter II, the types of sin, which each character has committed, were classified. First of all, we can see intolerance, pride, and narcissism in the cases of Natsue, Murai, Keizo. Otherwise, the case of Yo-ko is different from theirs. Yo-ko is an ideal person with an innocent soul; however, she also has committed as sin. The writer Miura described the christian original sin in her work through the case of Yo-ko, and nobody has written about that until then. The case of Yo-ko tells us that nobody can be free from the original sin.

The writer Miura is asking to her readers, "Isn't it the greatest sin not to have the sense of sin?" Also, she describes plainly the group of selfish people, who break other

※ A thesis submitted to the Committee of the Graduate School of Education, Cheju National University in partial fulfillment of the requirements for the degree of Master of Education in February, 2000.

people's hearts and can't realize their dream at their families

or at their communities, even though they have a desire of happiness. It's natural that their common life comes to be tragic. In this study, the writer shows the way to happiness when we are conscious of the sin. And it is natural that the sense of sin is connected with death complicatedly.

In Chapter III, I examine the meaning and the patterns of death. The patterns are divided into physical 「death」 and the mental 「death」, when they are connected with life. Natsue, Murai, Keizo are living corpses, even though their bodies are alive. It is to describe the moderns who is fallen into the spiritual death. On the other hand, the death of a missionary saves the other lives and abides in their memory. The Yo-ko's suicide shows us that she has other people's sin on her back as a victim. In Hyo-ten, many patterns of death are described, but this work tells us that to be dead is not the way to solve the problems of life. Only the process to overcome the sense of sin in people's lives can be the real life.

In the last chapter, the opposite forgiveness that Yo-ko is longing for is the God's love, and that is essential for the human beings as the true love. In addition, we discussed the role of the true love in the family. The true love means to understand other people and to sacrifice for them. Finally, Miura suggests us that only to be conscious of the true love is the purpose of the life and that the ideal family is the base of the ideal communities.

年 譜

1922. 4.25. 北海道旭川市に生まれる。
1935. 4. 旭川市立高等女学校入学。
1939. 3. 歌志内市立神威小学校に代用教員として赴任。
1941. 9. 旭川市立啓明小学校に転勤。
1946. 3. 同学校退職。
1946. 6. 肺浸潤と診断され入院、以後入退院をくりかえす。
- 1948.12. 前川正と再会、キリスト教にふれる。
1949. 6. 自殺未遂。
1952. 5. 脊椎カリエスと診断される。
1952. 7. 5. 病床で洗礼を受ける。
1954. 5. 2. 前川正死去。
1955. 6.18. 三浦光世の見舞いを初めてうける。
1959. 5.24. 三浦光世(当時35歳)と結婚。
1963. 1. 「氷点」執筆開始。
1964. 7. 「氷点」入選。
1969. 1. 「道ありき」を刊行。
- 1970.11. 「この土の器をも」を刊行。
1971. 5. 「続氷点」を刊行。
- 1971.12. 「光あるうちに」を刊行。
1982. 5. 直腸癌の手術を受ける。
1992. 1. パーキンソン病の診断を受ける。
1994. 2. 「銃口」を刊行。
1998. 6. 三浦綾子記念文学館オープン。
- 1999.10.12. 北海道旭川市内の病院で多臓器不全のため死去。享年77歳。